



新生讃美歌ハンドブック

教会音楽室長 江原美歌子（相模中央）

『新生讃美歌ハンドブック』が、期待と祈り、またたくさんのご協力により完成に導かれたことを主に感謝します。「名称」や「中身」、「内容」についての検討では、長く時間を投じ、「バプテスト」、また、教会の働きに資するバプテスト連盟の出版物として相応しいものを、と協議を重ね、以下の内容が確認されました。

他の解説本に紹介されていない賛美歌解説。

作者自らの声を載せ、曲の背景、作者の紹介、また思いを伝える。

連盟諸教会・伝道所の礼拝、伝道の賛美に資する参考資料。

これらを受けて、第1弾は、バプテスト連盟内の教会・伝道所のメンバーまたはその関係者の賛美歌を取り上げ、“オリジナル創作賛美歌編”としての賛美歌解説本とさせていただきます。

107曲の創作賛美歌には76もの人々、教会やグループが関わっており、いずれもバプテスト連盟の諸教会・伝道所に関係された方々です。消息がつかめていなかった方々の近況もわかり、お人柄、信仰生活に触れることができました。文明の利器である「メール」を大いに活用しましたが、アクセスのない方々にはお電話し、直接お話しを伺うことができました。その方の生い立ちをゆっくりと伺い、詞や曲が生まれるまでのストーリーを尋ねながら、1曲1曲に、作者の人生と信仰が凝縮されていることを実感することができました。

編集の課程の中で気づかされたことの1つは『新生讃美歌』が「バプテスト」を表していることです。特定の人を作るのではなく、信徒一人ひとりの働き、参与が大切にされ、それを喜ぶ群れであるということです。『新生讃美歌2003』の編集時も、応募賛美歌は、専門性の有無を問わず、一信徒によって起こされたことを尊重しつつ、賛美歌そのものを検討し選考していきました。

2つめは『新生讃美歌』がプロテスタントの「賛美歌を生み出す伝統」を受け継いでいることです。日本のプロテスタントの歩みは欧米の賛美歌を中心に歌ってきましたが、『新生讃美歌Ⅲ』からは、私たちの証しとして、主を告白し賛美することを大切に、推進してきました。このハンドブックは、その信徒の取り組みを紹介し、また、この働きを喜び、受け継いでいくことを励ますものとなっています。『新生讃美歌2003』発刊から10年となる今でも、その働きを続けていかなければならないと強く思われています。主を愛する人「誰もが」賛美を生み出していくことが求められ、又そこに「誰でも」預かれる恵みに感謝します。そして、「つねに」賛美を生み出していくバプテストの群れでありたいです。

2012年度地方連合教会音楽担当者会報告

藤井 秀一（酒田のぞみ/教会音楽専門委員）

去る10月3日から4日にかけて、連盟事務所において「地方連合教会音楽担当者会」が行われました。これは、各地方連合の音楽委員が集まり、お互いの活動や課題についての情報交換とネットワーク作りを目的とする会です。

集まることの意味

江原室長は開会礼拝メッセージのなかで、こうして各地方連合の教会音楽担当者が一堂に会し、テーブルを囲んで出会い、対話し、いろいろな壁が崩され、そして仲間となっていくこの現場も「和解のための奉仕」の場であると、2コリント5:17～20の御言葉を通して語られ、緊張の中にも主の導きに期待を感じつつ会議は始まりました。

続いて各連合の担当者一人ひとりから自己紹介と、この会議に期待することが語られていきました。「他連合の教会音楽取り組みを知りたい」「どこにどのような音楽の賜物のある方がいるのか知りたい」「連盟との距離感を感じるので、この機会に近づきたい」「新生讃美歌について学びたい」など、他の連合や教会音楽室からの情報を得ることを期待する方々が大半でした。しかしなかには「そもそもなぜ音楽委員が必要なのかこの機会に考えたい」という連合の音楽担当者という働きについて本質的な問いを携えて参加された方もいました。

課題の共有

今回は東北連合と関西連合が都合により欠席でしたが、出席して下さった11連合の音楽担当者の中には、一年間代理ととして連合の音楽委員に関わっているかた、三年間欠員だった音楽委員に去年立てられたばかりというかた。またここ数年、連合として音楽担当者を立てることが出来ず、役員会兼任となっている、とご報告くださったかたと様々な状況がありました。

連合ごとの活動報告では、一方的に報告を聞くだけでは、活動のアイデアを交換するにとどまってしまうので、今回はそれぞれの報告に対し、互いに問いかけや意見交換を交わす時間を設け、それぞれの連合の取り組みの意義や課題・問題点を掘り下げました。互いに励まし合い、証を分かち合い、地方連合音楽担当者としての仲間意識を深めるひと時となったようです。

たとえば、奏楽者不在の課題がいくつかの連合から出されました。それに関する意見交換の中で、

- 1) 70歳を過ぎた方が、教会の温かなフォローの中オルガニストとして礼拝で奉仕し、奏楽者として育てられている
- 2) 自分の教会は、音楽の専門性の高さゆえに壁を作っているのかもしれない

いとのおづきが与えられた

3) わたしたちの地域では奏樂者がいないならアカペラで歌いましょう、という前向きな雰囲気である

等が語られ、ハッとさせられる言葉にも出会い、顔と顔を合わせて語る中からこそ得られる、新しい視点や気付きの言葉に感謝しました。

新生讚美歌10年

会議の中では「新生讚美歌10年を迎えるにあたって」というテーマで、宣教研究所の濱野道雄氏、そして賛美歌検討専門委員の伊藤園子氏からも発題をいただきました。その後の意見交換においては、バプテストは自分たちの言葉で賛美歌を作ること大切にしてきたゆえに、新生讚美歌にはオリジナルの賛美歌が沢山あることや、これからは個人の信仰の言葉に留まらず、教会の言葉となっていく創作賛美歌の必要性などが語られていきました。ある連合の取り組みとして「創作賛美礼拝」というものが紹介されたときには、皆さん興味深く聞き、質問や意見が交わされました。

最後に、会議の終わりに出席者の皆さんが一言ずつ語ってくださったこの会議の感想をいくつかご紹介し、報告とさせていただきます。

- ネットワーク作りも大切だが、生の声はやはり違う。
- 皆さんの顔を見ながら、課題を共有出来ることはありがたい。閉塞感が打破される。
- 「やらざるを得ない状況にある奏樂者が、用いられている喜びを感じているだろうか」との長年に亘る課題に、「礼拝」の本来の意味を確認することで、その答えが得られたように思う。
- 皆さんの話を聞きながら、音楽委員の責任を感じた。初心に戻りたい。
- 「音楽」の壁を取り払って、後継者の育成を考えていきたい。
- 自分が頭の中で考えていたことが、ある連合ですでに実践していることを知り、希望を持った。
- 自分は前任の音楽委員で、今回は代理できたが、参加して改めて現音楽委員をサポートしたいと思った。
- 小さい連合で苦闘している中で、連盟から頂くものに隔てや「これは無理」と感じていたが、今回の会議を通して、もっと教会音楽室に対し積極的にこういうものがほしいと言っていきたいと思った。
- 「音楽」としての専門性を高めていく方向性ではなく、むしろわたしたち自身の言葉で、わたしたち自身の奉仕で、わたしたちの礼拝を捧げていくために、連合の音楽担当者としてなにか出来るのかを考えていきたい。
- どこの連合も本質的な課題は同じ。楽しんで課題を考えていきたい。

新生讃美歌 94番 われらは主の民

山中 臨在 (浦和)

教会という言葉聞いて、まず「建物」としての教会や「制度」としての教会を思い浮かべる方もおられるでしょう。しかし覚えてほしいことは、原語の「エクレシア」の本来の意味が、「主によって召し出された民」であることです。さて、この概念を表した賛美歌がないことを嘆いている一人のアメリカ人がいました。ヴァージニア州でバプテスト教会の牧師をしていたトマス・A・ジャクソンです。「それなら君自身がそんな賛美歌を作ればいいじゃないか」という友人の勧めに従ってジャクソンが1973年に書き上げたのが、『新生讃美歌』94にある「われらは主の民」です。

ところで、今、全国壮年会連合が神学校献金のためにTシャツを販売しているのをご存知ですか？ このTシャツは、賛美歌「われらは主の民」をイメージしてデザインされています。「教会形成を担う」と「伝道者養成の業に参与する」ことを願う壮年会連合は、「主に召し出された者」であることを自覚してイキイキと福音を伝え、奉仕に励もうというヴィジョンが与えられています。そんな彼らはこの賛美歌によって心が奮い立たされ、主から命じられた業にますます励むようにというメッセージを頂いて、このTシャツづくりに至ったそうです。私達を召して下さった主の招きに応じて、頂いたみ言葉と恵みを「主の民」として力を合わせて伝えていこう！その思いはまさに作詞者ジャクソンが言い表したかったことでありましょう。

ちなみに、この賛美歌は、アメリカのバプテスト讃美歌では、『新生讃美歌』にあるメロディーとは異なり、フランツ・ヨーゼフ・ハイドンが1797年に作曲し現在「ドイツの歌」として知られているメロディーが付されています。ハイドンのメロディーもよく知られていますので、私達もこの賛美歌をハイドンのメロディーで歌うことができます。この他にも、「87 87 D」というミーター（韻律）の賛美歌はたくさんあります（例えば、ベートーベンの第九交響曲の中の「歓喜の歌」のメロディーなど）から、ジャクソンの詞をいろいろな曲で試してみるのも或いは面白いかもしれません。しかし『新生讃美歌』が採用しているこのロシア民謡のメロディーは、頻りに登場する符点のリズムが躍動感を与え、「主の召しに応じて歩んでゆこう」という熱いメッセージを力強くサポートしているのではないのでしょうか？ 実際アメリカでも、このロシア民謡のメロディーでこの賛美歌を歌う教会が今でも多くあります。

この賛美歌が私に語りかけていることがもう一つあります。賛美歌は数多くありますが、自分のみ言葉によって示されたある事柄を通して賛美したいと思っても、それに該当するものが見つからない場合もあるでしょう。「それなら君自身がそんな賛美歌を作ればいいじゃないか」とジャクソンの友人が語った言葉は、賛美歌創作が話題になっている今日、私にも、あるいは皆さんにも投げかけられているのかもしれない。